

# 古代印播郡船穂郷の開発

栗田 則久

## はじめに

奈良時代以降急激に規模を大きくした集落の成立の要因として、有力者によって展開された荘園などの地域開発などがあることが徐々に明らかとなってきた<sup>1)</sup>。筆者も、荘園開発などの観点から、印旛沼西岸地域と九十九里南部地域の開発について述べたことがある<sup>2)</sup>。本論では、当財団が実施した平成26年度出土遺物公開展「千葉ニュータウンの昔むかし」の展示準備の中で新たな発見もあり、改めて印旛沼西岸地域、特に千葉ニュータウンに伴って調査された印播郡船穂郷の中心地域と想定される印西市船尾白幡遺跡<sup>3)</sup>・鳴神山遺跡<sup>4)</sup>・西根遺跡<sup>5)</sup>を取り上げて集落の動向を検討するとともに、開発の様相についても言及してみたい。

## 1. 古墳時代終末期の印旛沼東岸と西岸

奈良・平安時代の集落が成立する背景を考える上で理解しておかなければならないのが古墳時代終末期の印旛沼東岸と西岸の古墳のあり方である。

印旛沼周辺の古墳群で最も注目されるのが、東岸に位置する公津原古墳群と龍角寺古墳群である。公津原古墳群は、4世紀前半から7世紀代まで続く総数129基の古墳で構成される下総地域有数の大規模古墳群である。大型の前方後円墳は、6世紀初頭と想定される全長86mを測る前方後方形の墳丘をもつ船塚古墳、6世紀前半から中葉頃の全長63mの前方後円墳である天王塚古墳が確認されるが、6世紀後半以降の大型古墳は見られなくなる。

一方、公津原古墳群の北方の利根川流域沿いに所在する竜角寺古墳群は、総数113基の古墳で構成される。この古墳群最古の古墳は、6世紀前半段階の埴輪を樹立した円墳である101号墳であるが、この古墳群の最大の特徴は、公津原古墳群で大型古墳が築造されなくなる古墳時代終末期にきわめて大型の古墳が営まれる点にある。全長78mを測る竜角寺古墳群中最大の前方後円墳である浅間山古墳は、後円部に掘り込まれた大型の複室構造の横穴式石室を埋葬施設としている。この石室には筑波山周辺で産出する雲母片岩の板石が用

いられている。出土遺物の様相からは7世紀前半という年代が想定されるが、石室の構造からは7世紀初頭頃の築造と考えられている。浅間山古墳の築造以降もなくして出現したのが終末期としては全国2位の規模（1辺80m）を誇る方墳の岩屋古墳である。この古墳には、やや小形の単室構造の横穴式石室が2基併設されている。この石室には付近に産出する貝化石を多量に含んだ切石が主体的に用いられ、天井石のみに片岩がのせられている。近年の確認調査により、西側の石室の一部に軟質砂岩が使われていたことが明らかとなり、本古墳の石室の石材は3種類あることが判明した。

龍角寺古墳群では、浅間山古墳の築造を最後として前方後円墳は見られなくなり、岩屋古墳に代表されるような方墳が主体を占めるようになる。浅間山古墳から岩屋古墳及び他の方墳群へと変遷するなかで、石室に使用された石材は、片岩（浅間山古墳）→貝化石切石+片岩など（岩屋古墳）→貝化石切石（岩屋古墳以降の方墳）へと変化していることが想定される。

一方、印旛沼西岸地域の古墳は、古墳時代前期から終末期まで確認されるが、小型の古墳が散見される程度で、東岸地域とはまったく異なった様相を示している。その中で注目されるのが、貝化石を含む切石を用いた石室が採用された古墳の存在である。印西市域ではいくつかの古墳で確認されている。唯一調査（石室測量）された上宿古墳は、岩屋古墳東石室と類似した形状で、貝化石切石を丁寧に積み上げている。八千代市沖塚古墳も同種の石材が使われた古墳として知られている。

印旛沼西岸のこれらの古墳は、龍角寺古墳群の岩屋以降とほぼ同時期であり、整美に仕上げられた上宿古墳の石室の構築などから、印旛沼東岸北部の龍角寺古墳群の築造技術が西岸地域にもたらされたと想定される。龍角寺古墳群が含まれる地域は、律令制下の下総国埴生郡に比定され、郡領氏族は「大生部」（オオミブベ）とされる。川尻氏は、浅間山古墳以降の大型古

墳の造墓主体を「大生部」と考えており<sup>6)</sup>、貝化石使用の石室を埋葬施設とした印旛沼西岸地域の古墳の分布は、「大生部」の当該地域への進出を裏付けるものと思われる。後述するように、西岸地域の船穂郷の開発に「大生部」が関与していることと併せて興味深い事象である。

## 2. 戸神川流域の古代集落

先述したように、古墳時代終末期の印旛沼東岸と西岸の様相から、当該時期の印旛沼西岸地域の終末期古墳造営には東岸地域、特に律令制下の埴生郡域の勢力が大きく関わったのではないかと想定される。ここでは、その後の奈良・平安時代の集落がどのように展開していったのかを、調査例の多い戸神川流域周辺を中心に概観してみる。

この地域の中心となる集落は、戸神川河口付近に集中して営まれた船尾白幡遺跡・鳴神山遺跡・西根遺跡である。この3遺跡については後に詳述するが、古墳時代の集落は小規模で、どちらかという閑散とした景観が広がっていたようである。その様相が一変するのが8世紀以降であり、古代印播郡船穂郷の中心地となっている。

鳴神山遺跡の西側に当たる神崎川を望む台地上には北の台遺跡が立地する。8世紀末から9世紀前葉の堅穴住居跡3軒のみの小規模な遺跡であるが、1軒の住

居から、土製の馬形3点と人形1点が出土し、律令祭祀の一端を伺わせる資料となっている。戸神川を遡った上流域には9世紀代を主体とした堅穴住居跡24軒が調査された南西ヶ作遺跡が所在する。掘立柱建物跡は確認されていないが、緑釉陶器や灰釉陶器が少数ながら出土し、本遺跡の西側に位置する大塚前遺跡と同系の下総国分寺丸瓦も出土しており、その関連が注目される。また、カマド祭祀を示すカマド内からの鹿骨の出土も注目される。印旛沼を挟んだ対岸上には、大規模な集落が展開する八千代市栗谷遺跡や上谷遺跡などがあり、印旛沼に注ぐ新川を遡った地域に、八千代市萱田遺跡群が所在する。

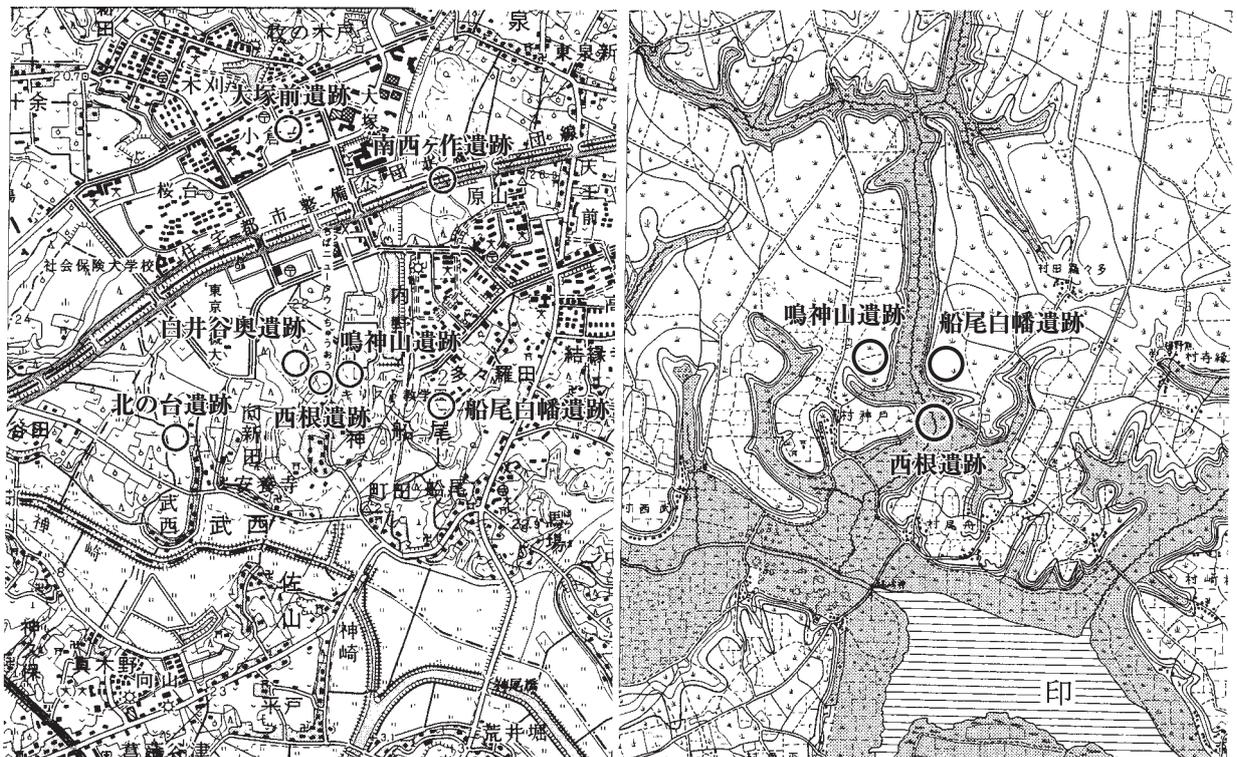
上記のように、印旛沼西側の沼を挟んだ北側の戸神川や神崎川流域、南側の新川流域に県内でも屈指の大規模集落が展開している。古墳時代終末期の様相から考えて、当該地域の開発は印旛沼東岸の有力氏族によるものと捉えておきたい。

## 3. 印播郡船穂郷の中心集落

印旛沼に注ぐ戸神川河口付近の谷津を挟んだ両側の台地上に、船尾白幡遺跡と鳴神山遺跡が対峙して立地し、両遺跡に挟まれた戸神川低地には西根遺跡が位置する。以下で、3遺跡の集落変遷を考えてみる。

### 時期区分

ここでは、集落の変遷を検討する前に、出土量が多



第1図 戸神川流域の遺跡分布図

い鳴神山遺跡を中心に、8世紀から9世紀までを四半世紀ごとに割る形で时期的な特徴をあげてみる。

#### 1期（8世紀第1四半期）

須恵器では、常陸国新治産の退化したかえりと扁平なつまみを有する蓋や体部の立ち上がりが緩やかな大型の杯が特徴的で、底部が高台より突出する湖西産の高台付杯が加わる。土師器は、古墳時代終末期の杯の系統を受け継ぐような平底状を呈する杯が主体的で、丸底で大型の皿状の杯や盤状杯が伴う。甕は、在地の甕とともに古墳時代後期以降の常総型甕が伴う。古墳時代の球形胴に近い形態に比べると全体に細身となり、胴上半部に最大径を有するようになる。

#### 2期（8世紀第2四半期）

1期に比して須恵器の割合が多くなる。杯は体部が直線的に開き、器高がやや浅くなるタイプが主体となる。土師器杯は、1期のタイプの皿に加え、この時期の須恵器杯を模倣したようなロクロ成形の杯が出現する。土師器甕の様相は第1期と類似するが、最大径がより上位に位置するようになる。他に、特徴的な土器として、丸底の畿内系刷毛甕や外面に同心円のタタキが施された須恵器甕が確認される。

#### 3期（8世紀第3四半期）

前期に引き続き須恵器の割合が高い。須恵器蓋は口縁端部が折り返しとなる。須恵器杯は、2期に比べて底径が小さくなり、体部の外傾度が強くなる。一方、口径が大きく器高の深い高台付き杯や底部がやや突出する高台付きの大型皿もみられる。土師器の杯では、盤状杯が姿を消し、2期より口径が小さく器高が深くなる杯が主体的となる。須恵器甕のタタキは横方向が主体である。土師器の常総型甕の割合は前期同様多いが、やや細身で小型化が進む。

#### 4期（8世紀第4四半期）

須恵器の杯は、前期に比して小型となるが、器高は相対的に深くなる。高台付き杯も同様である。土師器の杯も同様に小さくなり、器面全体をヘラケズリするタイプが目立つ。一方、この時期の特徴でもある小型化した箱形杯が多くなる。高台付杯も同様の箱形の体部となる。須恵器甕は縦方向のタタキが多くなり、土師器の常総型甕の割合は少なくなる。

#### 5期（9世紀第1四半期）

前期までに比べて須恵器杯の割合が少なくなる一方で、須恵器甕・甌の出土量が多くなる。須恵器杯は、前期同様器高は深い、口径と底径の差が大きいものが主体的となる。須恵器甕や甌は、最大径を有する口

縁部が大きく外反し、胴部がやや丸みを持ちながら窄まる特徴を有する。胴部のタタキは、縦方向のものが主体となる。土師器杯は、底径が小さくなる逆台形状のタイプが主体で、口径に比して底径が比較的大きい扁平なタイプが伴う。全面ヘラケズリの土師器杯も前期同様出土量が多い。5期以降増加する皿が少量ながら出現する。内黒の器高の深い椀状の杯もみられるようになる。鳴神山遺跡Ⅱ004号住居跡から出土した「弘仁九（819）年」の記年銘が書かれた墨書土器が指標となる。

#### 6期（9世紀第2四半期）

須恵器杯の出土量はさらに少なくなり、下総産のもので占められるようである。須恵器の甕・甌類は比較的多くみられ、形態は前期と類似するが、横方向のタタキはほとんどみられなくなる。土師器の杯は、5期と類似するタイプが残る一方で、底径をさらに減じ、体部が内湾気味に開き、口唇部がやや外反する形態が多くなる。また、7期に主体的な口縁部が大きく外反するものも含まれ、複雑な様相を示している。土師器皿は、無高台の皿に加えて、灰釉陶器を模したような高台の付く皿が中心となる。甕は、常総型がほとんど姿を消し、縦方向のやや幅広のケズリを施した在地産が主体となる。また、ロクロ成形による甕が出現するのもこの時期である。

#### 7期（9世紀第3四半期）

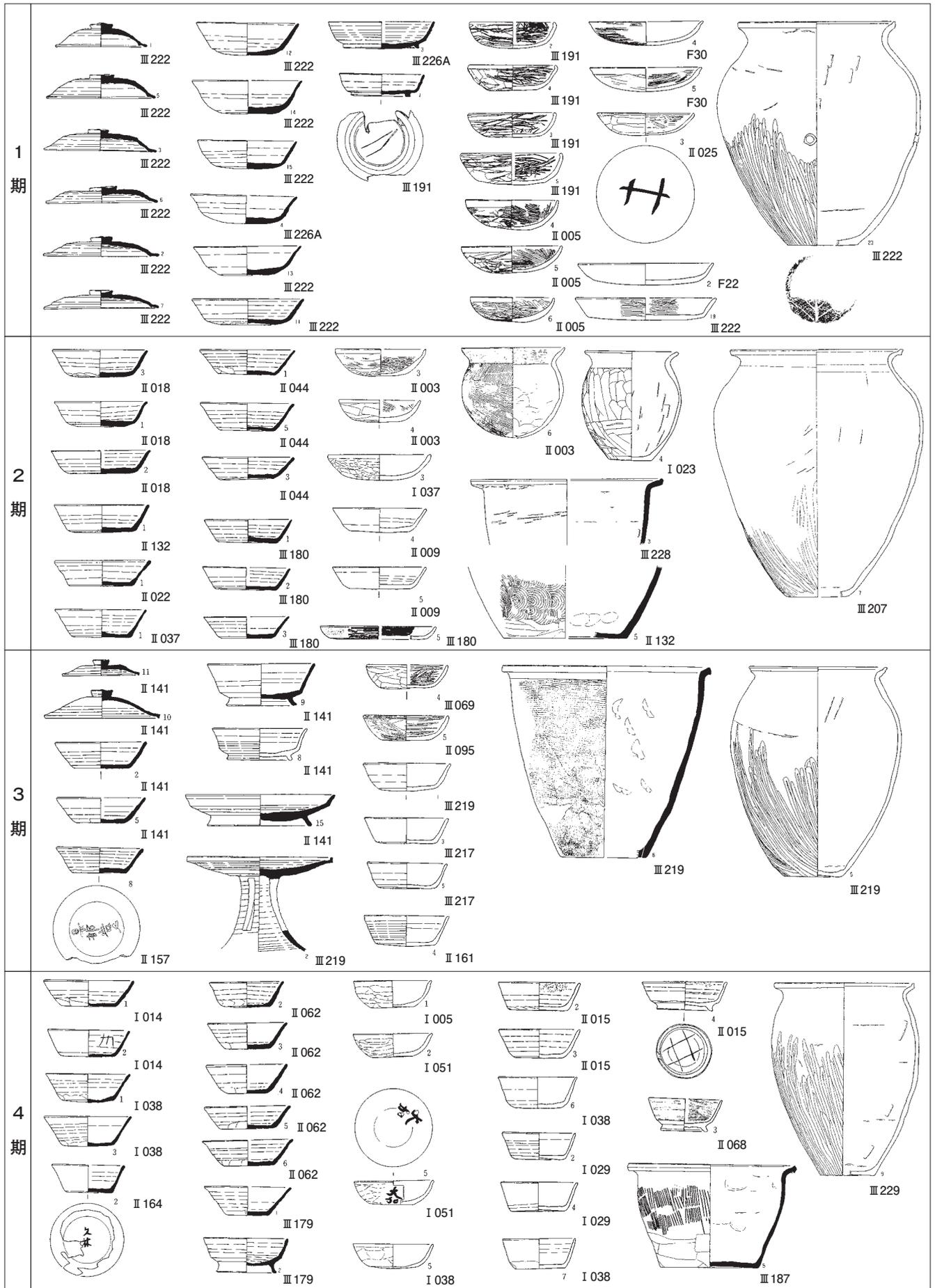
施釉陶器の搬入が他時期に比較して目立つ時期である。下総産の須恵器杯はきわめて客体的な存在となるが、甕や甌はタタキを消すようなヘラケズリやナデを加えたものが存在する。土師器の杯や皿は、口縁部が大きく外反するタイプが主体で、内黒処理されたものも多くなる。土師器の甕は、胴部上半縦位、下半横位へのヘラケズリを施す在地のものが主体的である。

#### 8期（9世紀第4四半期）

下総産の須恵器杯は姿を消し、甕類も少なくなる時期である。土師器の杯は、底部切り離し後未調整のものが多くなり、体部下端に底径を小さくするような面取り状のケズリを加えるものもみられる。また、ロクロ目が強く残り、器形に歪みのあるものもみられる。土師器甕は、口唇部が内側に折り返されるような特徴的なものが出現する。

#### 9期（10世紀第1四半期）以降

資料数がきわめて少ないため、器種構成による特徴は呈示できないが、底部無調整の土師器杯や、小型の高台付壺、小皿などの出現が判断基準となる。



第2図 奈良・平安時代の土器編年図(1)

(I～III・Nは鳴神山遺跡、Fは船尾白幡遺跡、土器の小番号は報文挿図の土器番号)



#### 4. 各遺跡の集落展開

上記した時期区分をもとに、広範囲に調査された鳴神山遺跡を中心に、部分的な調査範囲にとどまった船尾白幡遺跡や低地の流路の調査となった西根遺跡を補足的に加えて集落変遷を考えてみる。

なお、説明の煩雑さを避けるために、竪穴住居跡の規模（面積）は、9.0㎡未満をA、9.0㎡～15.9㎡をB、16.0㎡～24.9㎡をC、25.0㎡～35.9㎡をD、36.0㎡以上をEとする。

##### ①鳴神山遺跡

印旛沼に注ぐ神崎川の支流である戸神川を東に望む東西300m、南北600mという広大な面積の台地上に位置する。調査はその半分強で、未調査部分が多く残っている。発掘調査は、対象面積70,590㎡に対して昭和63年度から平成15年度にわたって、地点を変えながら行われた。その結果、縄文時代から中世に至る遺構や遺物が確認されたが、特に奈良・平安時代の集落が傑出した存在となっている。

##### 1期

古墳時代の竪穴住居数は数軒程度で、1期以前は閑散とした景観を呈している。この時期は、総数10軒確認され、調査区中央部付近にまとまる傾向があるが、全体的に分散した分布を示している。竪穴住居の規模は他の時期に比べて大きいものが存在する。Aの小型の住居はなく、B（最小11.2㎡）が4軒、Cが1軒、Dが2軒、E（最大38.4㎡）が3軒となる。「廿」と書かれた墨書土器が調査区中央のSI025より1点出土している。本遺跡最古の文字資料であり、県内でも初期段階の墨書土器である。

##### 2期

この時期になると集落の規模が大きくなり、遺跡全体で28軒の竪穴住居跡が確認される。分布は1期同様調査区全体に広がっているが、中央部分南側に集中する傾向が強い。住居面積では、A（最小6.8㎡）が3軒、Bが13軒、Cが9軒、D（最大25.4㎡）が3軒で、大形住居のEタイプは確認されない。

##### 3期

集落規模はさらに拡大し、総数35軒となる。竪穴住居跡の分布状況は2期とほぼ同様であるが、調査区北側にも本格的な広がり示し、2軒～3軒程度のまとまりが伺われるようになる。住居面積は、A（最小6.0㎡）が6軒、Bが16軒、Cが10軒、D（最大33.1㎡）が4軒となり、B・Cタイプが主体となる。この時期になると、文字資料が散見するようになる。特に、調査区

南端のSI II 139から、焼成前に「日下部吉人」と刻まれた新治産の須恵器杯が出土している。生産地で書かれたものであるが、「日下部」と本遺跡の関係は不明である。9世紀代に多くみられる「大」の墨書土器の出現がこの時期に求められる。

##### 4期

この時期に相当する竪穴住居数は32軒で、3期とほぼ同様の集落規模である。調査区内の分布状況は、3期に集中していた中央部南側が少なくなる一方、北側への広がりが目立つようになる。また、2軒1単位のグループが明瞭になってくる時期でもある。住居規模は、A（最小4.2㎡）が5軒、Bが21軒、Cが4軒、D（最大30.3㎡）が2軒で、Bタイプが圧倒的に多くなり、規模の均一化が図られるようになる。

文字資料も増加傾向を示す。「丈尼 丈部山城方代/丈尼」の出土から、方（形）代による祭祀的な行為がこの時期から行われていたことを示している。また、「大」に加えて、9世紀代に主体となる「大加」・「大八」・「久弥良」も現れてくる。

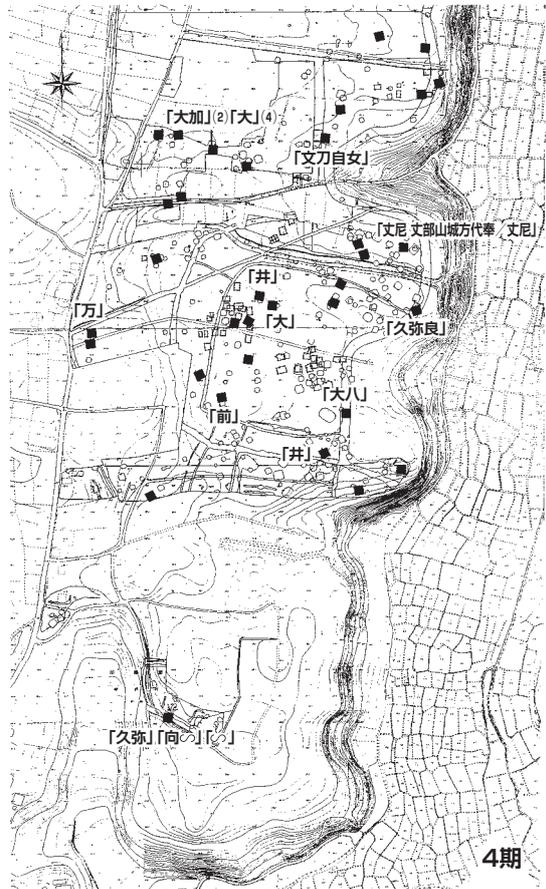
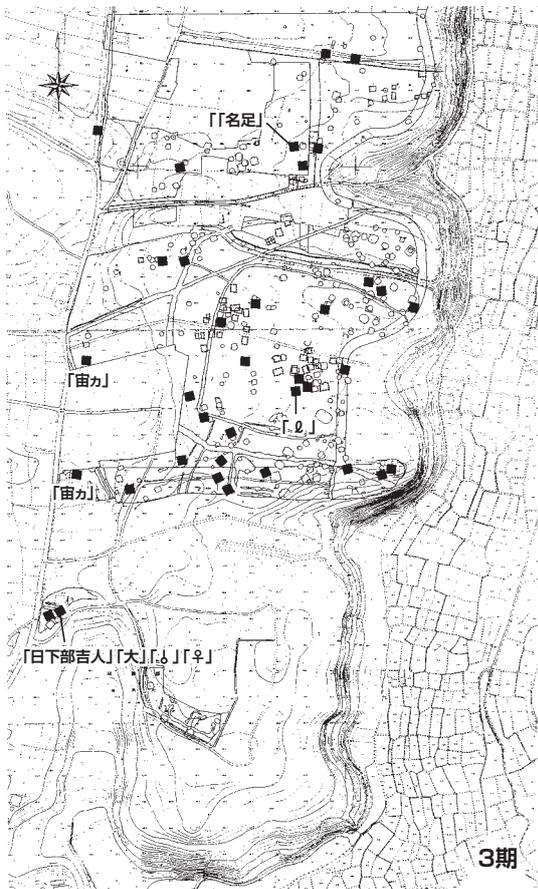
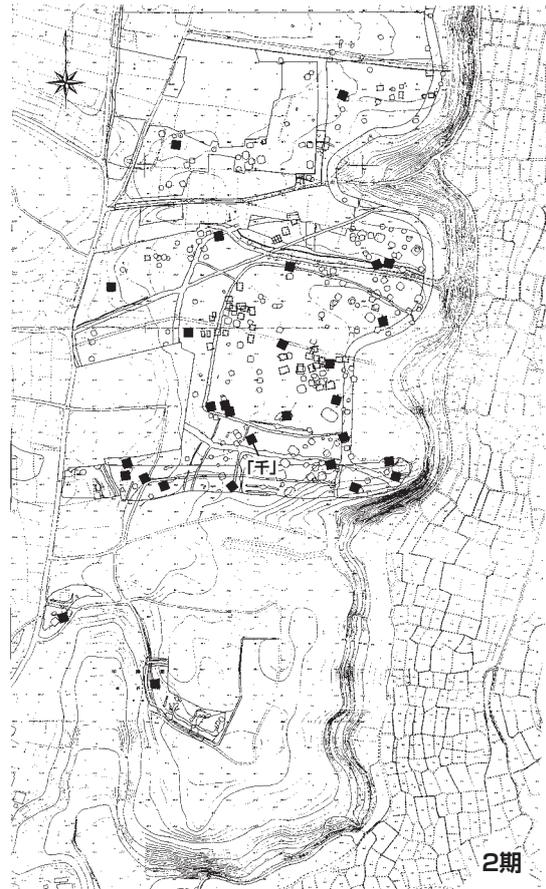
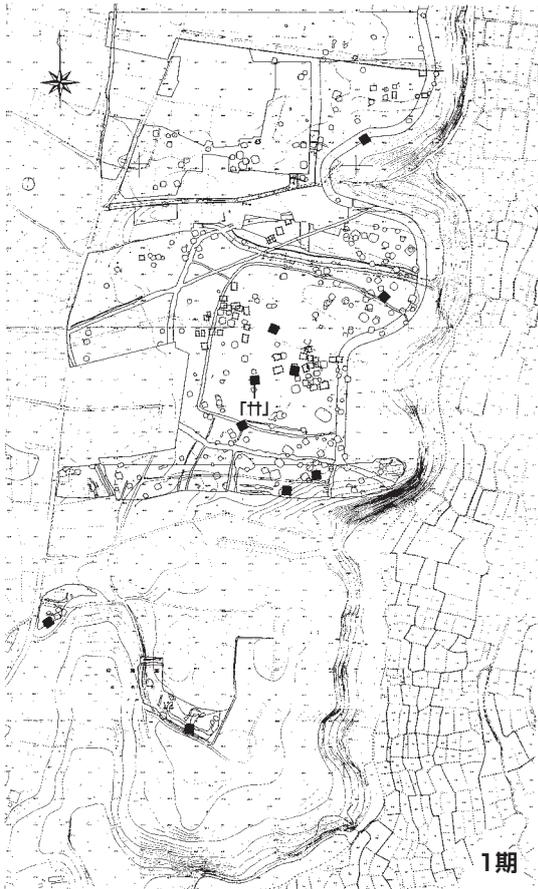
##### 5期

この時期の竪穴住居数はやや減少し、総数27軒を数えるが、分布は4期とほぼ同様の状況である。また、限られた調査範囲ではあるが、調査区南端には5期以降竪穴住居跡は確認されなくなる。この時期にも2軒1単位のグループで構成される傾向が強い。住居規模は、A（最小5.3㎡）が3軒、Bが18軒、Cが3軒、D（最大30.0㎡）が2軒となり、4期同様Bタイプが主体を占める。

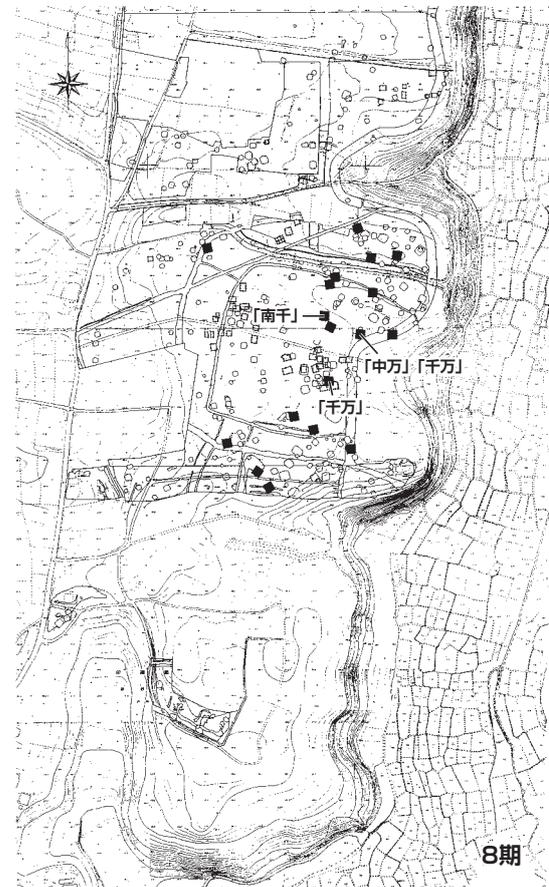
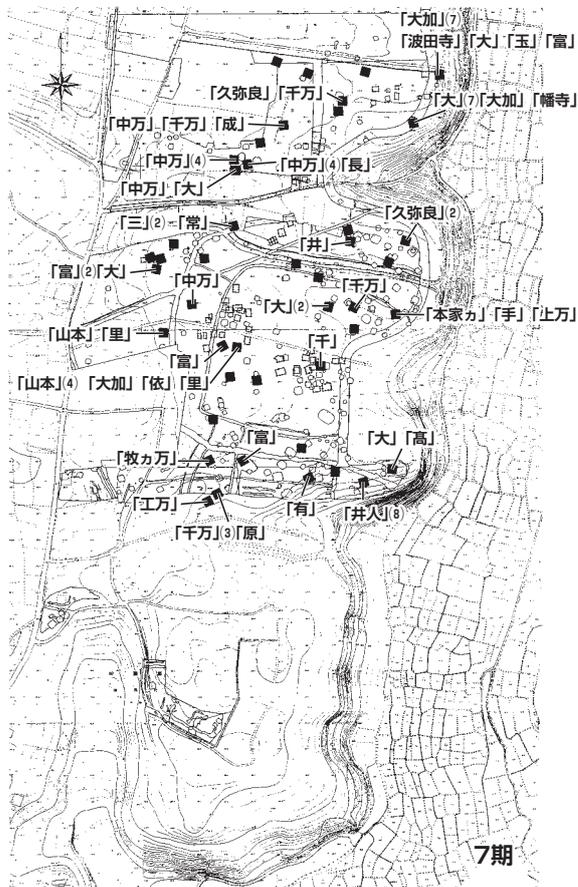
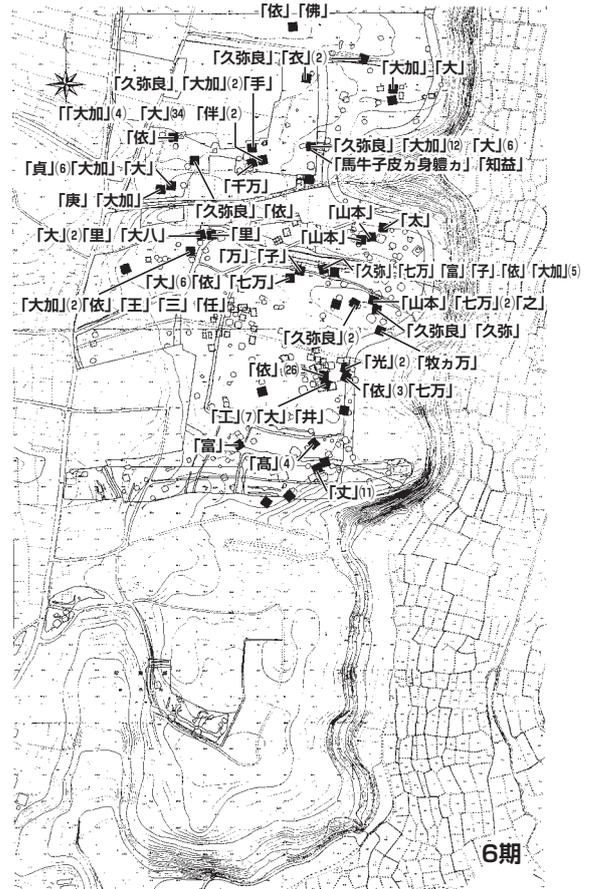
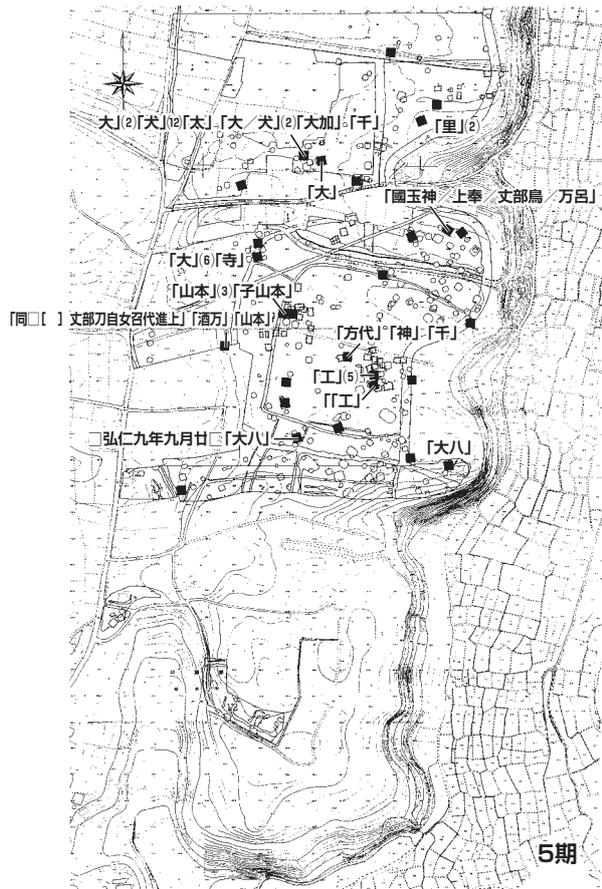
文字資料も増加し、特に、長文墨書（「国玉神上奉丈部鳥万呂」・「同□□丈部刀自女召代進上」・「弘仁九年九月廿」）のような祭祀的な墨書土器が集中する時期でもある。また、「方代」の線刻もみられ、5期に祭祀的な行為が繰り返し行われていたことが伺われる。4期にみられた「大」・「大加」・「大八」に加えて、新たに「山本」・「工」が加わってくる。前者が比較的広範囲に分布するのに対し、後者の2つの文字は2軒1単位のグループ内で完結している点で興味深い。

##### 6期

この時期に竪穴住居数は再び増加傾向を示し、総数39軒となる。調査区中央が中心となることは5期以前と変わらないが、北側部分にも広く展開するようになる。集落規模が拡大しても2軒1単位の住居構成は基本的に踏襲されているようである。住居規模は、A（最小2.9㎡）が7軒、Bが21軒、Cが10軒、D（最大



第4図 鳴神山遺跡集落・文字資料時期別分布図(1) (カッコ内の数字は点数)



第5図 鳴神山遺跡集落・文字資料時期別分布図(2) (カッコ内の数字は点数)

32.5㎡)が1軒で、Bが主体となるものの、Cのやや大型の住居が占める割合が5期に比して多くなる。

文字資料の出土量は全時期の中で最も多い。ただ、長文墨書土器は、「馬牛子皮か身體か」1点のみで、その内容は5期の長文墨書土器とは性格が異なるようである。3期以降に存在した「大」・「大加」・「久弥良」が調査区北側を中心に比較的広範囲に分布している。一方、5期に出現した「工」は区域を踏襲するようにはほぼ同じ位置で確認されるのに対し、「山本」は台地縁辺の東側に移っている。6期になって新たに出現する墨書土器が「依」である。調査区中央東側の掘立柱建物群が占地地点に集中する傾向が強いが、北側にも広がりが見られ、「大」や「久弥良」と類似した分布状況を示している。調査区南側では、1軒の竪穴住居跡から「丈」が11点出土しているが、この時期のみの存在である。また、同じ区域に「高」が4点確認される。この文字は次の7期に近接地で継承される。

#### 7期

鳴神山遺跡の集落規模が最も大きくなる時期で、総数45軒の竪穴住居跡で構成される。その分布は偏りがほとんどなく、4期以降希薄な分布を示していた南側調査区にも広がりをみせる。一方、前期までにみられた2軒1単位のグループがやや崩れてくる時期でもある。住居規模は、A(最小5.5㎡)が8軒、Bが31軒、Cが4軒、D(最大27.6㎡)が1軒で、より小型化の傾向を示している。

文字資料の出土量は6期に次いで多い。前期までの文字を継承しているのは、「大」・「大加」・「久弥良」・「山本」で、「大」・「大加」は広範な分布、「久弥良」は調査区北側にみられる。「山本」は5期と同じ場所に戻る。「大」・「大加」の分布がみられる調査区北側の台地縁辺部にある2軒の竪穴住居跡から、同じ寺を指すと思われる「波田寺」・「幡寺」が出土しており、この区域がこの時期仏教的な性格を有していたようである。

この時期新たに出現する墨書土器は「中万」と「井人」である。「中万」は調査区北東側の区域から集中して確認される。第6期の「大」と「大加」が多量に出土した竪穴住居跡に隣接することから、「大」・「大加」を継承するような文字とも考えられるが、周囲に「大」・「大加」が存在しなくなることから、新たに「中万」に代表される人々が進出してきた可能性もある。「井人」は1軒の竪穴住居跡から8点確認され、その内7点は線刻文字である。6期の「丈」に似た存在であろう。

#### 8期

この時期になると、集落規模が急激に縮小し、竪穴住居総数18軒にとどまる。集落の分布は特徴的で、前時期まで多寡がありながらも竪穴住居跡が営まれていた調査区北側から姿を消し、1期や2期に近い調査区中央及び南側に分布するようになる。住居規模は、A(最小5.8㎡)が3軒、Bが14軒、C(最大17.2㎡)が1軒で、さらに小型化が進んでいる。

文字資料も少なくなり、7期を継承する「中万」・「千万」及び新たな「南万」がみられる程度である。

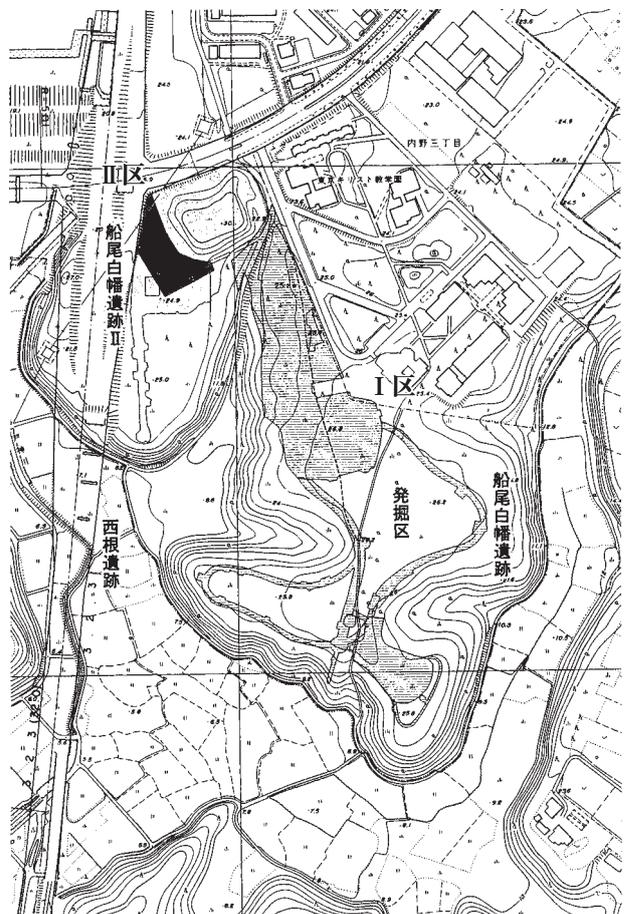
#### 9期以降

集落が終息する時期で、10世紀中葉頃が最終段階になる。文字資料もみられなくなる。

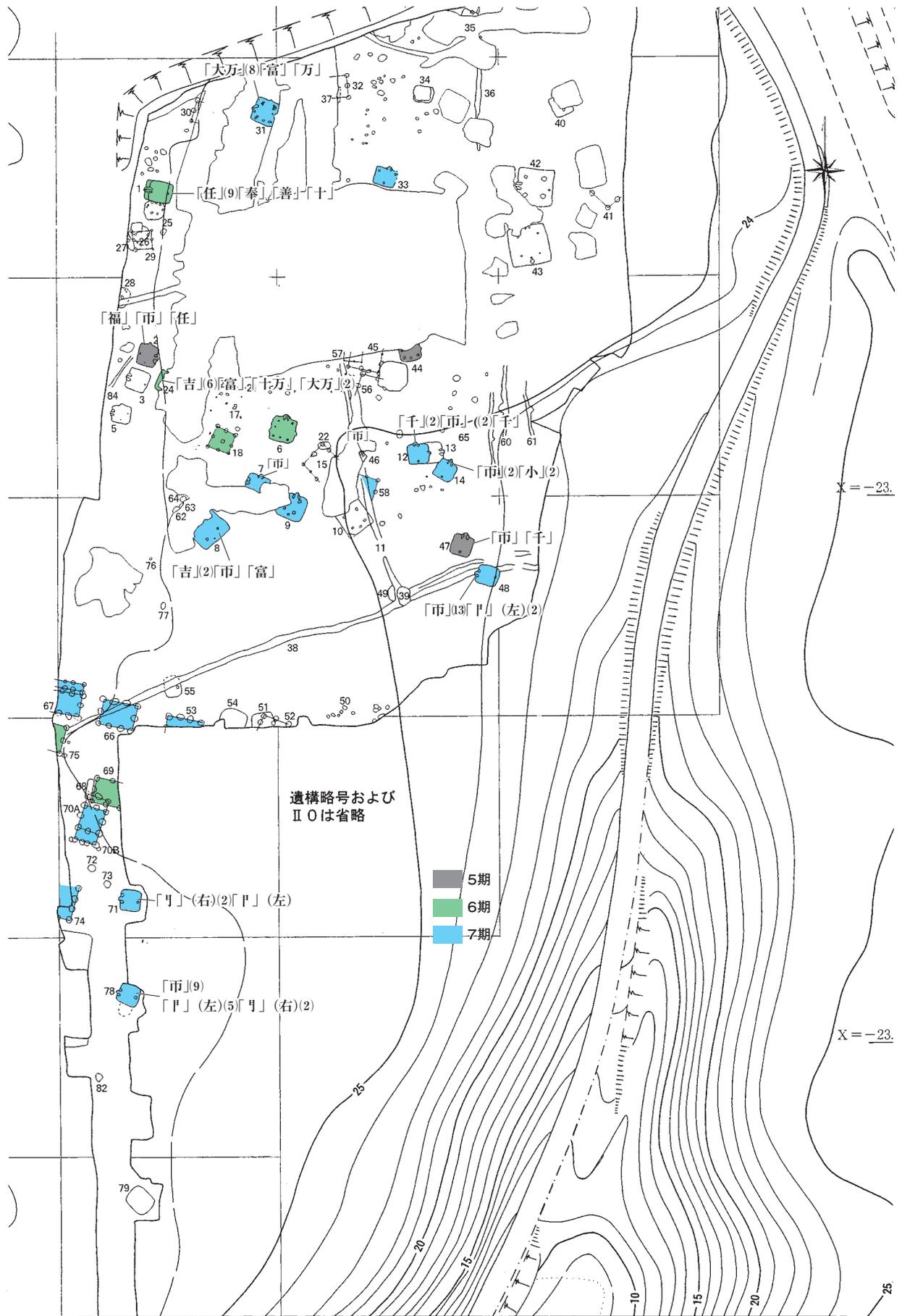
#### ②船尾白幡遺跡

戸神川を挟んで鳴神山遺跡と対峙するような標高25mほどの台地上に位置する。

平成6年度～10年度まで、総面積37,800㎡を対象に調査が行われ、現在、千葉県立北総花の丘公園Eゾーンとして、公園の一面となっている。公園整備のための必要最低限度の調査範囲となったため、多くの部分が未調査部分として現存している。部分的な調査のた



第6図 船尾白幡遺跡調査区



第7図 船尾白幡遺跡Ⅱ区集落・文字資料時期別分布図

め集落全体を明確にすることはできないが、現状での集落変遷と墨書土器の関係を概観してみる。なお、戸神川から入り込む小支谷の東側台地の調査（船尾白幡遺跡）をⅠ区、西側台地の調査（船尾白幡遺跡Ⅱ）をⅡ区として説明する。

調査区内では、古墳時代後期以前の集落は確認されず、7世紀後半の竪穴住居跡が2軒単独で確認される程度である。Ⅰ区のみ存在する1期の集落は、7世紀後半の竪穴住居跡が立地する調査区中央の東側から入り込む谷頭周辺の区域を踏襲するように、30㎡ほどの比較的大形の竪穴住居跡2軒と10㎡ほどの小型住居跡2軒がまとまっている。2期も1期の区域に竪穴住居跡1軒のみ確認されるが、南側に広がる未調査区の中に当該時期の住居が存在する可能性が考えられる。3期も2期までと同じ区域に4軒確認される一方で、調査区南側にも広がりを見せている。この時期の竪穴住居跡は10㎡～13㎡程度の規模で、大型の住居は確認されない。墨書土器はこの時期から出現し、9世紀代にも継承される「富」や大型の皿に書かれた「國」がある。

4期も3期とほぼ同様の分布を示すが、集落を構成する竪穴住居跡の軒数が多くなり、本格的な展開をするようになる。Ⅱ区はこの時期から竪穴住居跡が営まれるようになる。中心となるのは1期から継続するⅠ区の調査区中央の区域で、2軒1単位のような構成が伺われる。住居規模は、A（最小6.8㎡）が1軒、Bが11軒、C（最大19.7㎡）が3軒で、Bタイプが主体を占める。文字資料の出土も多くなり、3期にみられた「富」が継続するとともに、新たに「市」がⅠ区中央部及びⅡ区、「千」がⅠ区南側に現れる。また、Ⅰ区の3軒の竪穴住居跡から出土した「息」はこの時期に中心を置く文字である。

5期の竪穴住居数は5軒と少なくなる。鳴神山遺跡でもこの時期に竪穴住居数の減少が確認されており、本遺跡でも同様の状況があったようである。住居規模は、10.9㎡を最小、15.2㎡を最大としている。出土した文字資料の中では、Ⅰ区の「立合」が注目される。この文字は東金市久我台遺跡を代表する資料で、字形の変化という点で注目されている。船尾白幡遺跡で確認された「立合」は、合わせ文字へと変化したものと共通している。一方、次期以降主体的に展開する「任」がⅡ区に現れる。

6期は再び竪穴住居数が増加する時期で、その分布は、5期までの区域を継承しながらも、Ⅰ区の北側に

も範囲を広げるようになる。住居規模は、A（最小6.5㎡）が2軒、Bが6軒、C（最大20.7㎡）が5軒となり、2期～5期に比してやや大型の住居が多くなる。文字資料はさらに多くなり、4期で出現したⅠ区南側の「千」がⅠ区北側の1軒の竪穴住居跡から16点出土している。この住居からは「市」も8点伴っている。また、鳴神山遺跡5・6期にみられた「里」の文字も確認されている。Ⅱ区では、別々の竪穴住居跡から、「任」が9点、「吉」が7点まとめて出土している。

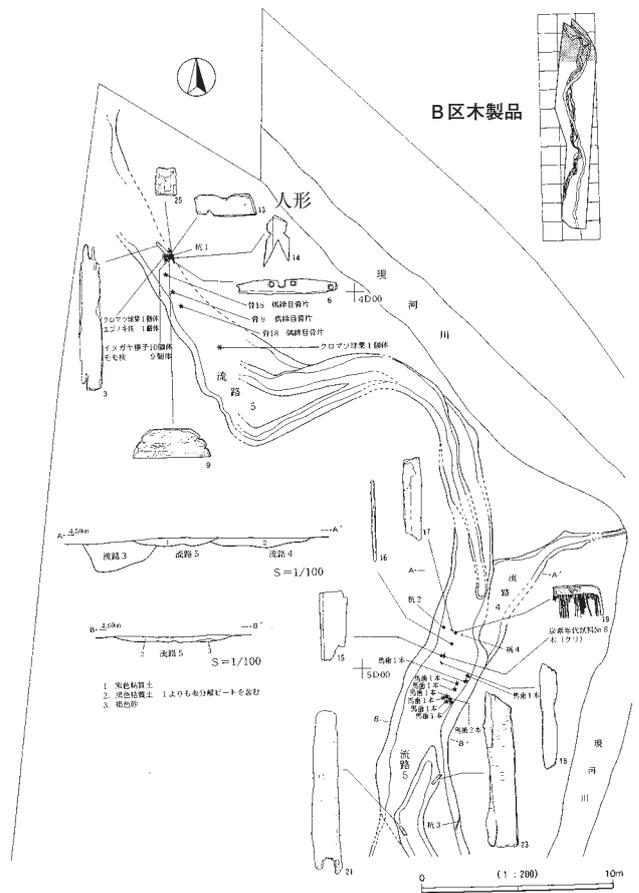
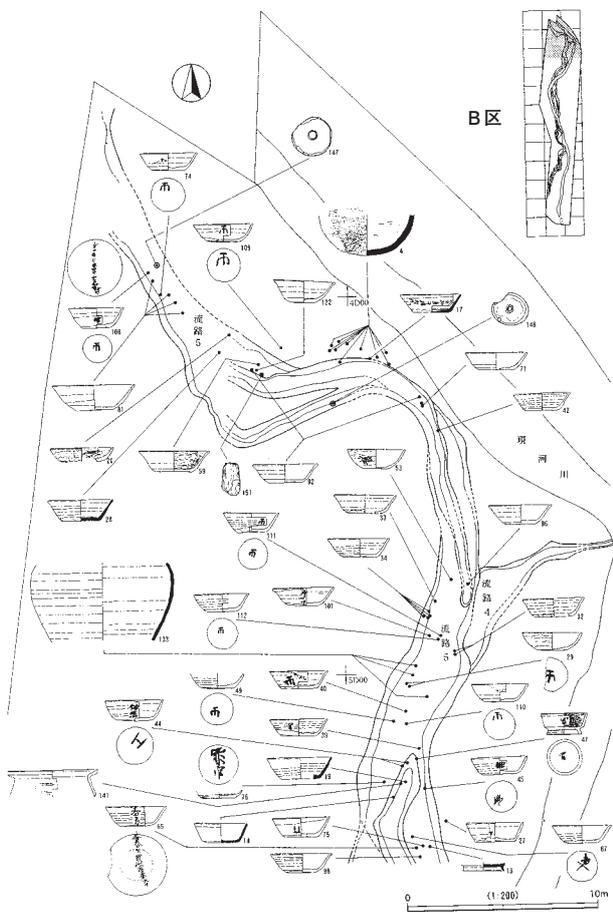
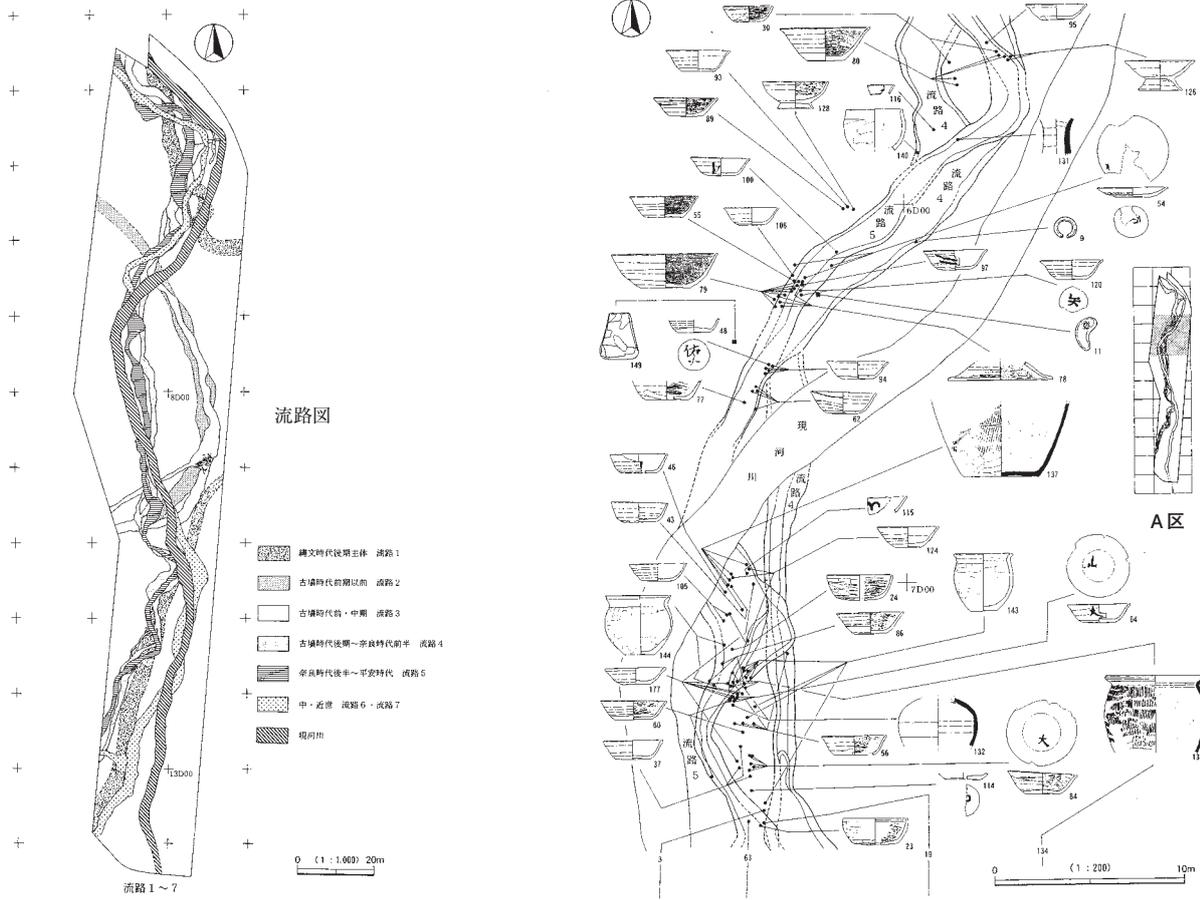
7期は本遺跡で最も集落が拡大する時期で、鳴神山遺跡と共通する。Ⅰ区で9軒、Ⅱ区で9軒と同数であるが、調査面積比でみると、Ⅱ区に中心が移行した感がある。Ⅱ区では2軒～3軒が1単位となって集落を構成しているようである。住居規模は、A（最小8.6㎡）が1軒、Bが13軒、Cが4軒で、本遺跡最大の面積E（37.2㎡）がⅡ区に存在する。前期に続き、文字資料も多い。「千」・「市」がⅠ区・Ⅱ区にみられるが、「千」はⅠ区北側の2軒の住居でまとめて出土し、「市」はⅡ区に中心を置く。また、「任」はⅡ区のみ限定される。この時期に主体的にみられる「大万」はⅠ区・Ⅱ区ともに確認され、いずれの住居とも複数個体出土している。

8期は急速に竪穴住居数が激減し、Ⅱ区では姿を消し、Ⅰ区でも2軒のみにとどまる。文字資料も確認されない。9期以降は閑散となり、10期（10世紀第2・4半期）の竪穴住居跡1軒が集落の最終段階となる。

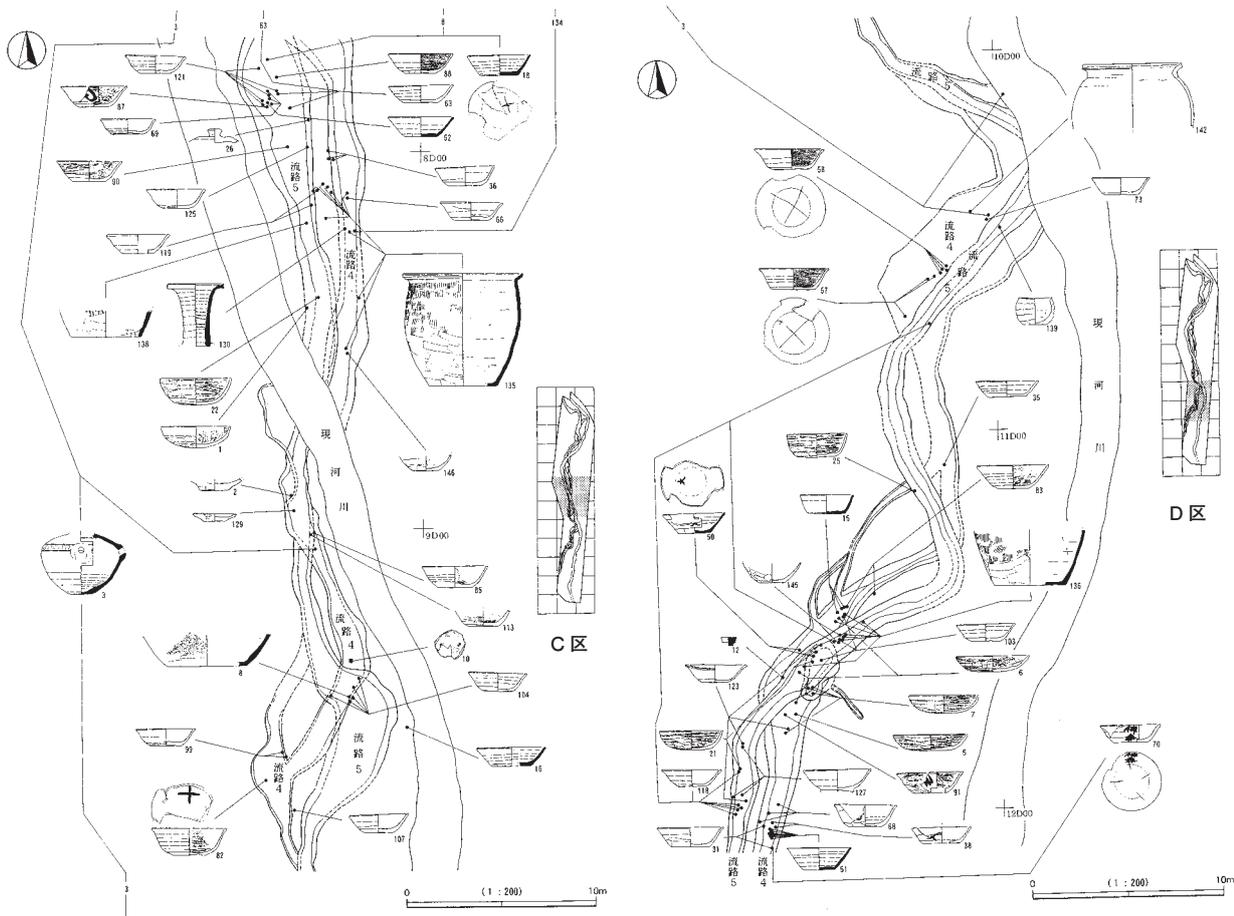
### ③西根遺跡

本遺跡は、鳴神山遺跡と船尾白幡遺跡に挟まれた標高4mの戸神川低地に存在する。発掘調査は平成11年7月～同12年10月に8,590㎡を対象に実施され、縄文時代後期から中・近世にかけての流路及び遺物集積地点が確認された。調査範囲からは、7条の流路が発見され、その内2条（4・5）が古墳時代後期～平安時代の遺物を含む流路である。流路4は出土遺物が少ないが、古墳時代後期～1期の比較的短期間に機能していたようである。流路5は3期～10期に属し、多量の墨書土器や木製品が出土している。

西根遺跡における墨書土器の時期変遷（第11・12図）を概観してみる。西根遺跡の墨書土器の出現は3期で、須恵器杯に「大生部直子猪形代」と書かれた長文墨書土器がA区北側に単独で出土している。県内で出土例の多い「形代」を含む祭祀の中では初期段階の資料となる。次の4期は資料数が多く、その分布をみると、3点確認された「富」はA区南側に集中するとともに、



第8図 西根遺跡地区別遺物分布図(1)



第9図 西根遺跡地区別遺物分布図(2)

「神奉/工」と「佛」が伴う。一方、「大」・「佑火」は単独で存在する。5期の文字は「市」のみで、4期の「富」と同じ区域に集中する。

6期は再び資料数が多くなり、3期の長文墨書土器と同じ性格を有する「丈部春日女罪代立奉大神」及び「罪官」が4期・5期と同様A区南側にまとまっている。4点確認された「市」と「息」・「吉」も同じエリアとしてよからう。7期になると、6期とは分布状況が異なり、A区北側に集中する。長文墨書土器は、「舟穂郷生部直弟刀自女奉/市」で、3期と同じ氏族名が書かれているだけでなく、分布も類似している。8期の「矢」と「十」はB区・C区に単独で出土する。

以上の墨書土器の分布状況からは、A区の北側と南側で明確な区分けが受け継がれ、北側は「大生部」・「生部」=大壬生部、南側は「丈部」が祭祀を行う領域として意識されていたようである。

### 5. 掘立柱建物群

掘立柱建物跡は、鳴神山遺跡で43棟、船尾白幡遺跡で36棟調査されており、全体の遺構数に占める割合は船尾白幡遺跡の方が高い。以下で掘立柱建物跡の時期

変遷を検討してみるが、限られた出土土器から想定される建物の時期をもとに、軸方向を同じくする建物を抽出して構成を考えてみた。

鳴神山遺跡では、調査区中央部に東西に分かれて集中する2つの群（西側を1群、東側を2群とする。）を取り上げる。この区域の掘立柱建物跡の出現は2群での3期に求められる。この時期の建物は、3間×3間の東西棟2棟、2間×3間の東西棟2棟、2間×2間1棟で構成される。3間×3間の建物は面積30.4㎡と31.0㎡で、鳴神山遺跡では最大の面積を有する。建物群で囲まれた内部には広い空間が存在し、南西側に同時期の竪穴住居跡が3軒近接して営まれている。4期は北西側の1群に移動し、2間×3間の東西棟2棟と南北棟1棟、2間×2間の正方形の建物2棟の計5棟で構成される。軸方向をほぼ真北にそろえる。建物で囲まれた内部には、軸方向を同じくするやや大型の竪穴住居跡が所在する。

次の5期は1・2群ともに多くの建物が営まれる時期である。1群では、4期建物の北側と西側にやや移動して建てられるため、北側と西側のグループに分け



第10図 鳴神山遺跡掘立柱建物跡集中区時期別分布図

ることも可能である。北側グループは、2間×3間の東西棟3棟と南北棟2棟で構成され、4期より真北に近くなる。面積は最小18.0㎡、最大27.3㎡とややばらつきがある。建物群南側には2軒の竪穴住居跡が東西方向に並んだ状態で位置する。一方、西側のグループは2間×2間の建物2棟と並列する1間×2間の南北棟2棟で構成される。北側グループに比べて小型となることから、北側グループに付属する建物群とも想定される。なお、2間×2間の建物は4期にもみられた建物である。2群では、H37の東側柱穴が確認されていないが、2間×3間の東西棟となる可能性が高く、群全体では、2間×3間の東西棟2棟と南北棟1棟及び2間×2間の建物1棟で構成される。建物群南側に竪穴住居跡2軒が南北に並んで掘り込まれている。

6期は掘立柱建物群の最終段階で、2群に2間×2間の東西棟2棟と2間×3間の南北棟1棟が確認される。軸方向にややばらつきがみられるが、H36の南に軸方向を同じくする竪穴住居跡が2棟南北に配置されている。また、H32の南側にも小型の竪穴住居跡が2軒存在する。

船尾白幡遺跡（第7図）では、Ⅱ区南側で規則的な配置が伺われる建物群が存在する。柱穴内から出土した土器から、SBⅡ53・70B・74は7期となる可能性が高い。この3棟と軸をそろえるSB66・67もこの時期と考えられる。また、69は70Bを建て替えた70Aに切られることから、6期と想定され、軸を同じくする75も同時期と思われる。調査範囲が限定されているため建物構成は不明であるが、この区域には6期に掘立柱建物が進出し、7期に本格的に整備されるようである。

## 6. 「大生部」と「丈部」

3遺跡の文字資料中に、祭祀行為を示す長文墨書土器が含まれている。そこには、「大生部」・「生部」・「丈部」という氏族名が記載されており、当該集落との関係が伺われる。

「大生部」・「生部」に付される「直」は東国の国造・郡司に多い姓であること<sup>7)</sup>、大生部は、「オオミブベ」と訓読されること<sup>8)</sup>が指摘されている。「ミブ部」は東国を中心に多く分布し、「壬生部」・「生部」・「乳部」とも書かれ、上宮王家に支配された部民であるとされている。

「大生部直」は、藤原麻呂邸跡と推定される平城宮左京二条大路から出土した付札木簡「左兵衛下総国埴生郡大生直野上養布十段」に記載がある。左兵衛府に

兵衛として上番（勤務）していた下総国埴生郡出身の大生（部）直野上の養物としての布十段を在地から送ったという内容である。川尻氏は、この木簡を元に考古学的な側面を加味しながら、埴生郡の郡司が大生（部）直であることを明らかにした<sup>9)</sup>。「大生部」の墨書土器は、千葉県山梨郷に属する四街道市南作遺跡でも「□梨郷長杯大生部直置麻カ」の墨書土器が出土しており、郷長としての「大生部」の存在が確認された。また、養老五（721）年の「下総国鉦托郡山幡郷戸籍」にみられる16名すべてが壬生部であることなど、香取海南岸の広い地域に郡領クラスの氏族として「大生部」が存在していたようである。

一方、「丈部」は大王の命令を地方に伝える使者を領内から選定して朝廷に送り出すなどの職務を担い、「大生部」同様東国に多い部民とされる。『続日本紀』天応元（781）年正月に「下総国印幡郡大領外正六位上丈部直牛養、…（中略）…授外従五位下、以進軍糧也」とあり、印幡郡の大領である丈部牛養が軍糧を進上した実績により下従五位下を授けられている。「大領」は、郡司の最高位を指しており、「丈部」が印幡郡の郡司であったことが理解できる。

「丈部」が含まれる出土文字資料は下総を中心に数多く出土しているが、「直」の付くものは現在までに確認されていない。一方で、「大生部」はそれほど多くないものの、「直」が付くものが複数確認される。このことが何を意味しているかは不明であるが、船穂郷に関しては、「丈部」より上位クラスに「大生部」が位置していたことが推測される。

## 7. 船穂郷の中心集落の展開と開発

ここでは、戸神川下流域に隣接して立地する鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡・西根遺跡の時期的変遷と相互の関係をまとめてみる。

3遺跡とも古墳時代後期は未開の地に近い景観が広がっていたようである。その状況から大きく変化するのが本論で取り上げた奈良時代以降である。集落の成立は、鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡ともほぼ同時期と考えられるが、3期にかけては鳴神山遺跡が中心となる。3期には鳴神山遺跡で掘立柱建物群が出現する。3間×3間の比較的大型の建物2棟を含む5棟が中央広場を意識したかのような配置を示し、有力者の存在が伺える。文字資料は鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡ともそれほど多くないが、低地の西根遺跡では「大生部直子猪形代」と書かれた墨書土器が出土しており、この時期に「祓え」のような祭祀的行為が始まったことを示し

	鳴神山遺跡	船尾白幡遺跡	西根遺跡	
3期	<p>8 「目下部吉人」 II 157</p>		<p>17 「大生部直子猪形代」</p>	
4期	<p>7 I 014 2 「久弥」 II 164</p>	<p>5 「大加/大加」 I 051</p> <p>5 「文刀自女」 I 029</p>	<p>5 「富」 I 区047</p> <p>3 「息/息」 I 区044</p> <p>2 「千」 I 区104</p>	<p>44 「神奉/工」</p> <p>39 「富」</p> <p>45 「佛/佛」</p>
5期	<p>9 「弘仁九年九月廿日」 II 004</p> <p>11 「同□□文部刀自女召代進上」 II 061</p> <p>26 「大加」 I 053</p> <p>123 「大/大」 I 047B</p>	<p>4 「市」 II 区002</p> <p>8 「市/市」 II 区047</p> <p>5 「立合」 I 区057</p> <p>6 「善」 I 区057</p>	<p>40 「市」</p> <p>49 「市」</p> <p>29 「市」</p>	

第11図 鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡・西根遺跡時期別主要文字資料図(1)

	鳴神山遺跡	船尾白幡遺跡	西根遺跡	
6期	<p>「大加」 35 I 044</p>	<p>「久弥良」 3 II 107</p>	<p>12 「任」 II 区001</p>	<p>65 「丈部春女罪代立奉大神」 76</p>
	<p>「大加」 4 I 044</p>	<p>「山本/山本」 10 I 007</p>	<p>「大方」 14 II 区006</p>	<p>「罪官」 76 67</p>
	<p>「大加」 15 I 033</p>	<p>「文」 16 III 208</p>	<p>12 「吉」 II 区006</p>	<p>「吉」 76 67</p>
	<p>「真」 7 I 033</p>	<p>「真」 7 I 033</p>	<p>12 「吉」 II 区006</p>	<p>「吉」 76 67</p>
7期	<p>「幡寺」 190 III 188</p>	<p>「大加」 3 III 190</p>	<p>「月/月」 3 II 078</p>	<p>「舟穂郷生部直弟刀自女奉/市/市」 108</p>
	<p>「中方」 5 I 050</p>	<p>「井人」 26 III 225</p>	<p>8 「市」 II 078</p>	<p>「市」 108</p>
	<p>「富」 2 II 065</p>	<p>「井人」 26 III 225</p>	<p>8 「市」 II 078</p>	<p>「市」 108</p>
	<p>「千万」 18 II 093</p>	<p>「南千」 20 II 077</p>	<p>8 「市」 II 078</p>	<p>「市」 108</p>
8期	<p>「中方」 10 II 080</p>	<p>「千万」 18 II 093</p>	<p>「南千」 20 II 077</p>	<p>120 「矢」</p>
	<p>「中方」 10 II 080</p>	<p>「千万」 18 II 093</p>	<p>「南千」 20 II 077</p>	<p>120 「矢」</p>

第12図 鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡・西根遺跡時期別主要文字資料図(2)

文字資料の遺跡・時期別一覧

	鳴神山遺跡	船尾白幡遺跡Ⅰ区	船尾白幡遺跡Ⅱ区	西根遺跡
1期	「廿」			
2期	「千」			
3期	「日下部吉人」・「大」・「久弥」	「富」(2)・「國」		「大生部直子猪形代」
4期	「丈尼 丈部山城方代奉/丈尼」・「文刀自女」・「大」(5)・「大加」(2)・「久弥良」・「大八」・「前」・「井」・「万」	「富」(2)・「十」(4)・「息」(2)・「奉」(2)・「廣磨」・「善」・「宜」・「七」・「千」	「天」(2)・「任」・「知」	「富」(3)・「神奉/工」・「佛」・「佑火」・「大」
5期	「国玉神/上奉/丈部鳥/万呂」・「」弘仁九年九月廿「」・「同□□ 丈部刀自女召代進上」・「方代」・「神」・「寺」・「大」(6)・「犬」(12)・「大/犬」(2)・「工」(6)・「山本」(4)・「大八」(2)・「千」(2)・「里」(2)・「子山本」・「酒万」	「立合」・「前」・「善」・「息」・「万」・「光」	「天」(2)・「任」・「千」・「福」	「天」(4)
6期	「馬牛子皮カ身體カ」・「大」(52)・「大加」(28)・「依」(36)・「衣」(2)・「丈」(11)・「久弥良」(9)・「久弥」(2)・「工」(7)・「貞」(6)・「高」(4)・「山本」(3)・「富」(2)・「里」(2)・「伴」(2)・「七万」(2)・「子」(2)・「井」・「太」・「庚」・「知益」・「千万」・「之」・「王」・「三」・「任」・「大八」・「佛」・「牧カ万」・「光」・「手」	「千」(17)・「天」(9)・「巾」(11)・「任」(2)・「富」(2)・「里」(2)・「小」(2)・「大万」・「善」・「山本」・「中」・「十」・「十坊カ」	「任」(9)・「吉」(6)・「天」(2)・「大万」(2)・「富」・「奉」・「善」・「十」・「十万」・「小」	「丈部春女罪代立奉大神」・「罪官」・「神奉」・「天」(3)・「息」・「吉」・「大」
7期	「幡寺」・「波田寺」・「大」(12)・「大加」(9)・「中万」(11)・「千万」(9)・「井人」(8)・「山本」(5)・「富」(5)・「久弥良」(3)・「里」(2)・「玉」(2)・「三」(2)・「井」・「成」・「長」・「牧カ万」・「依」・「千」・「本家カ」・「手」・「上万」・「常」・「有」・「原」・「高」・「工万」	「千」(25)・「富」(4)・「天」(3)・「大万」(3)・「十万」(3)・「上」(2)・「埴」・「寺」・「大」・「主」・「十」・「小」・「継□」	「天」(18)・「任」(11)・「門」(左)(8)・「門」(右)(4)・「吉」(2)・「富」(2)・「千」・「上」	「船穂郷生部直弟刀自女奉/天」・「天」(2)・「大」
8期	「千万」(2)・「中万」・「南千」			「十」・「矢」

ている。次の4期になると、鳴神山遺跡は3期と同様の集落規模であるが、船尾白幡遺跡で本格的な集落が形成され、特に、9世紀代に中心的な区域となるⅡ区に集落が進出するようになる。祭祀的行為を示す墨書土器は、鳴神山遺跡で「丈尼 丈部山城方代奉/丈尼」がみられる。出土した竪穴住居跡は戸神川低地を真下に望む台地縁辺部にあり、低地を意識しているように思われる。掘立柱建物群は鳴神山遺跡にみられ、3期の建物群の区域から北西に移動して1軒の竪穴住居を囲むように配置されるが、建物規模はやや小さくなる。この時期は、集落の拡大とともに文字資料の種類や点数も増加してくる。次期以降に鳴神山遺跡の主体的な文字となる「大」・「大加」や船尾白幡遺跡で継続して使用される「富」があり、いずれも西根遺跡でも確認されることから、台地上の集落と低地の祭祀遺跡との関係が想定される。

5期は、鳴神山遺跡及び船尾白幡遺跡とも集落規模がやや減少するが、鳴神山遺跡の掘立柱建物群は竪穴住居を2軒～3軒伴いながら飛躍的に棟数を増やしており、鳴神山遺跡の掘立柱建物群が最も整備された時期といえよう。長文墨書土器もこの時期に3点確認される。1群の建物群に含まれる竪穴住居跡からは、「同

□□ 丈部刀自女召代進上」と書かれた墨書土器が出土しており、丈部による祭祀行為と建物群の関係が伺われる。一方、2群に伴うと思われる住居からは、「形代」・「神」の墨書土器が出土し、やはりこの区域でも祭祀行為が行われていたようである。船尾白幡遺跡では「巾」の文字が多くなり、西根遺跡はこの文字のみで占められ、この時期は両遺跡の関連が強いようである。

6期は再び集落規模が拡大するが、鳴神山遺跡における掘立柱建物跡が最終段階を迎える一方、船尾白幡遺跡Ⅱ区に新たに掘立柱建物群が出現する。文字資料の点数はこの時期が最も多い。鳴神山遺跡では、前時期から比較的広範囲に分布する「大」や「大加」が出土量を増すとともに新たに「依」が加ってくる。一方、「工」や「山本」は前時期までと同様に狭い範囲に集中する傾向が受け継がれる。船尾白幡遺跡Ⅰ区では「千」・「天」・「巾」が主体となり、Ⅱ区では「任」・「吉」が目立つ存在となる。祭祀的な長文墨書土器は西根遺跡に「丈部春女罪代立奉大神」がある。「罪官」や「神奉」も伴うことから、3期にみられた低地での祭祀がこの時期再び台地上から低地へと移行していった可能性がある。鳴神山遺跡の南側台地縁辺部に近い1軒の

竪穴住居跡から出土した11点の「丈」墨書土器と西根遺跡の長文墨書土器は「丈部」という点でつながりが想定される。

7期は鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡とも竪穴住居数が最大となり、最も隆盛を極めた時期であるが、掘立柱建物に目を向けると、鳴神山遺跡では中心的な建物が姿を消す一方、船尾白幡遺跡では庇付き建物を含む建物群が規則的に配置されるようになる。この状況からは、5期までは鳴神山遺跡がこの地域の中心集落として機能していたが、6期に変化が生じ、7期になって船尾白幡遺跡、特にⅡ区が中心機能を有するようになったと考えられる。文字資料の出土量は6期に次いで多い。鳴神山遺跡では、これまで継続して書かれた「大」や「大加」などとともに、8期につながる「中万」・「千万」が主体的となり、文字内容にも変化が伺われる。船尾白幡遺跡では「市」と「千」が際立って多い。この点で注目されるのが、西根遺跡の「船穂郷生部直弟刀自女奉/市/市」の長文墨書土器である。「市」は船尾白幡遺跡を代表する文字であることから、船尾白幡遺跡Ⅱ区を拠点とした「生部直（大生部直）」が低地で祭祀行為を執り行ったものと思われる。次の8期は急激に住居軒数を減らし、10期頃に台地上から姿を消すようである。

以上の様相からこの3遺跡の動向をまとめてみる。奈良・平安時代の房総の集落は、古墳時代から安定的に集落が営まれる「伝統的集落」と、古墳時代後期にほとんど集落がみられない台地上に奈良時代以降急速に大規模な集落が展開する「開発型集落」に大きく分けることができる。この点では、船穂郷の中心集落となる鳴神山遺跡と府尾白幡遺跡は「開発型」の典型例となろう。

最初に開発が主体的に及んだ台地は鳴神山遺跡と考えられる。この開発を主導したのは、8世紀第4四半期から9世紀第2四半期にかけて鳴神山遺跡と西根遺跡でみられる長文墨書土器の存在から、「丈部」を想定することができる。この状況に変化が生じたのが9世紀第2四半期から第3四半期で、規則的な配置をした掘立柱建物群が鳴神山遺跡にとって代わるように建てられた船尾白幡遺跡が中心機能を担うようになる。また、「市」と「大生部」の関係から、「直」の姓をもつ「大生部」が「丈部」に替わって開発を主導していったことも想定される。極論するならば、鳴神山遺跡は「丈部」、船尾白幡遺跡は「大生部」の拠点で、西根遺跡は両氏族の共同の祭祀場として意識されていたとも

言えよう。

小牧氏は、鉄製農工具の出土割合が鳴神山遺跡や船尾白幡遺跡で多いことを指摘し、新興開発地の一つが船穂郷であるとしていること<sup>10)</sup>も当該地域が新規に開発されたことを補足している。

#### おわりに

近年、ニュータウンや土地区画整理事業に伴って奈良・平安時代の大規模な集落が調査され、奈良時代以降に開発が及び、中には、初期庄園として捉えることが可能な遺跡も各地に存在するようになった。今後は、同様の状況が想定される印旛郡村神郷に属する八千代市萱田遺跡群や千葉郡物部郷に属する四街道市物井地区の小屋ノ内遺跡や稲荷塚遺跡などの再検討や農工具の保有率などを分析して開発の実態を考えていきたい。

#### 注

- 1) 田中広明ほか 2007「特輯 古代東国の地域開発」『古代文化』第59巻2号（財古代学協会）
- 2) 栗田則久 2007「上総国・下総国における開発－印旛沼西岸・九十九里南部地域の様相－」同上
- 3) 糸川道行ほか 2003『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅦ－印西市船尾白幡遺跡－』（助千葉県文化財センター、糸川道行ほか 2009『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅦ－印西市船尾白幡遺跡Ⅱ－』（助千葉県文化財センター）
- 4) 田形孝一ほか 1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡－』（助千葉県文化財センター、萩原恭一 2000『千葉ニュータウン埋蔵部下材調査報告書XⅣ－印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡』、岡田誠造ほか 2004『印西市鳴神山遺跡Ⅳ－戸神地区営農地造成関連埋蔵文化財調査報告書－』（助千葉県文化財センター）
- 5) 小林信一 2005『印西市西根遺跡－県道船橋印西線埋蔵文化財調査報告書－』（助千葉県文化財センター）
- 6) 川尻秋生 2001「大生部直と印波国造－古代東国史研究の一試論－」『千葉県立中央博物館研究報告－人文科学－』第7巻第1号 千葉県立中央博物館
- 7) 井上光貞 1985「国造制の成立」『大化前代の国家と社会』井上光貞著作集4など
- 8) 津田左右吉 1963「大化改新の研究」『津田左右吉全集』3 岩波書店、前川明久 1991「蘇我氏の東国経営について」『日本古代政治の展開』法政大学出版局、同 1991「大化前代の下総地方について－私部と壬生・壬生部の設定をめぐる－」同上など
- 9) 注6)と同じ
- 10) 小牧美知枝 2014「印旛郡船穂郷のすがた」『平成26年度講演会「千葉ニュータウンの昔むかし」－千葉北部地区の歴史をさぐる－』発表要旨（公財）千葉県教育振興財団